●「持たざる国」の資源論

佐藤 仁著

日本の代名詞にもされてきた「資源なき国」という概念を、歴史を遡って検証。経済・外交・海外進出と結びつけられ、原料確保論や分配に偏った議論が主流を占めてきた中で、戦後初期には「資源＝枯渇するモノ」と規定せず、水・農地・地下資源を一体のシステムと捉える斬新な構想も存在した。この資源委員会（後の資源調査会）の構想の再評価を軸に新しい資源論を展望する。（東京大学出版会・二九四〇円）